

覚え書き

モラエスの絵葉書書簡

有坂 広一

その本を買うべきかどうか何度も手に取ったり戻したりして迷った。なじみのない文学者だけに最後まで読み通せるのか自信がない。それに値段も四千五百円と安くはない。そうは言うものの、パラパラめくって拾い読みすると、言い難い魅力を感じさせる。さて、どうする。途中で放棄したらもったいない。が、装丁がいいので、本棚に飾っておくだけでも価値があるような気がした。たとえ読まなくても、それでいいじゃないか：：私はやっと買う決心をした。

モラエスは徳島に十六年間住んでいたが、訳者によると、彼がポルトガルの文筆家であり、外交官であることを土地の人は誰一人として知らなかった。綿入れの袖なしのちゃんちゃんこを着た薄汚い大男のモラエスを毛唐とか西洋乞食とか呼んでいた。

この書簡集は一九一〇年（明治四十三年）から一九二九年（昭和四年）に至る二十年間に、故国の妹フランシスカに宛てた絵葉書郵便六〇九通が収められてお

り、日常的なことをこまごまと書いている。またこんなことも記されている：：僕は何が何でも作家になりたいと思っていた。一人ぼっちの奴の孤独のなせるわざだ。：：私は読みだすとやめられなかった。晩年は気力も衰え、震える手で書かれていて、判読できないほどだった。念のために最終の手紙の一部を引用する。

「いとしいシカ

家に春が来ている。お前のアサガオは芽を出しているにちがいない。好天だ。

夫君によろしく。さようなら」

モラエスはその一カ月後に他界した。読み終わった後、望郷の念が伝わってきて、日本の私小説を読んでいるような悲哀感に満たされた。

寂聴の熱愛

一時期、愛苑という雑誌を買って読んでいた。高橋鉄、竹中労、沼昭三といったユニークな人達がかかわっていた。が、短命に終わった。どの号だったかに瀬戸内晴美と井上光晴とが交際中という短い記事が載っ

ていた。小説を書いている友人に知らせたら、

「そんなのガセネタだよ」

と一笑に付した。私もゴシップの類いだらうと本気にしなかった。それから何年かして、突然のごとく瀬戸内晴美が得度して尼僧になるというニュースが流れ、世人を驚かせた。一体何があったのだろう。晴美は五十一歳の若さ、艶やかで美しく、ほとぼしするような色香を感じさせる。にもかかわらず男を断つなんて……私は単純にそんなことしか考えなかった。さらに長い年月を経て、大方忘れていた頃、ネットでマスコミ関係の人が書いている文章を読んだ。愛苑に載った記事は間違っていないかった。寂聴こと晴美は井上光晴と愛し合っていて、二人の恋愛は八年間に渡って続いた。その関係を断ち切るには、ただ「別かれましょう」ではすまされず、あえて出家することで成し遂げようとしたわけだ。天台宗の高僧だった今東光に「下半身は？」問われると、「絶ちます」と晴美は潔く答えた。私がつくづくもったいなく思ったのは、この辺りのことである。女盛りの女性が果たして実行できるのかと疑問を抱いた。後年、新聞に載った談話によると、男女の関係は一切なかったようである。真実と捉えてよいのか。別に男を断つことはないのだが。

参照「加登屋陽一のメモ」ネット

ゾルゲの指輪

ゾルゲ事件の講演会を聞きに行ったとき、会場の最前列の辺りに白髪の華やいだ女性が目に留まった。彼女はゾルゲの愛人石井花子である。私がかねてから關心のある伊藤律（旧共産党の幹部）とのからみでこの種の催しには好んで出かけていく。余談になるが、伊藤はゾルゲ事件の端緒を提供した人物とされてきたが、今や自供説は完全に覆された。その辺のことは渡部富哉が独自の調査をして『偽りの烙印』の中で詳しく書いている。それはともかく、後援会の会場で見た石井花子のことが忘れ難い。

彼女は岡山県倉敷市出身、二十二歳で上京し、銀座の料理店でウエイトレスをしているとき、ゾルゲと知り合った。花子は地主の娘として生まれ、育ちのいい、魅力的な女性だった。ゾルゲは故国に妻がいるし、国内外にも愛人がたくさんいたが、死ぬまでゾルゲの「妻」であることにこだわった。一九四四年（昭和一九年）、ゾルゲ謀報団のリーダーとして処刑されると雑司ヶ谷共同墓地に土葬された。戦後、花子は管理人の

許可を得て、ゾルゲの遺体を確認し、人を雇ってそれを掘り出してもらって施設で改めて火葬し、一年後の一九五〇年に多磨霊園に埋葬した。黒御影の墓石にロシア語でリヒアルト・ゾルゲ、その下に施主として妻石井花子と刻んだ。ゾルゲはその後、ソ連英雄の称号を授けられ、名誉を回復した。花子は遺品の金歯から作った指輪を終生愛用していた。その行為を残忍だと非難する向きもいるが、それは夫への深い愛情を示すもので、珍しいことではない。それどころか万葉集にもその手の歌がある。

珠たまならば手にも巻かむをうつせみの世の人なれば手に巻きがたし

：：石井花子も同じような心境だったのだろう。亡くなったのは二〇〇〇年七月四日で八十九歳だった。

きわものろん 際物論

三島由紀夫の事件ほど仰天したことはない。言うまでもなく、自衛隊市ヶ谷駐屯地に乱入してクーデターを画策し、失敗して割腹自殺を遂げたことだ。日本中がショックを受け、大騒ぎした。一体、あれは何だったのか。週刊誌で坪内雄三が哲学者の戸坂潤（一九〇

〇年——一九四五年）の「際物論」に触れて、興味深いことを述べている。「世界が凡庸で退屈でないためには、キワに充ちていることが必要だ。決まりきったことを配列した教科書の類いは決して面白くない」その通りだろう。私は得たりと感心した。三島事件も愚行を演じただけで、市民に有意義な意味や教訓をもたらしたわけではない。人間は時としてとんでもないことをやらかすものである。だからこそ生命力を吹き込まれて長生きさせる効用があるのだ。分かりやすく言えば、「火事と喧嘩は江戸の花」ということだろう。蛇足かもしれないが、事のついでに近年のエピソードを書いておく。私の住んでいる集合住宅に火事があった。火事となると平然としていられない。私も歩廊に出て別の号棟の火煙ひげりを見物した。ところで、同じ並びの一室にアジア系の家族が住んでいる。その家の若い細君が胸を躍らせているのである。彼女の浮かれた気持ち私が私にも伝わってきた。細君は家の前を通る住民に誰彼となく笑みを浮かべて挨拶している。私にも離れたところから会釈した。普段ははしことがないのに、その日は別だった。「江戸の花」にすっかり高揚して感情を共有しているのだろう。そうして言うならば三島事件も江戸の花と言っている。こういうことは生命力に

火をつけるものらしい。おかげで私も長生きしている。

ある舞踊家の死

はなやぎげんしゅう

花柳幻舟は打倒家元制度を掲げて、一九八〇年に日本舞踊花柳宗家への傷害事件を起こした人物である。

また羽仁五郎と交際したことも知られている。一九九〇年のある日、会社で仕事中に専務が通りかかり、今起こったばかりのニュースを知らせてくれた。

「球場に爆弾を投げた奴がいるよ」

さぞ死傷者がたくさん出て、大変な出来事が起こったと私はうろたえた。そして、

「どこの野球場ですか」

と聞いた。すると専務はぎよろりとした目つきで私じつと見つめて、返事もしないで立ち去った。後になつて気が付いた。球場ではなくて宮城だった。つまり皇居のことである。しかし今時、そんな言い方をする者はいない。専務は私より七、八歳年長だから、旧式も仕方がないかもしれない。その騒ぎは舞踊家の花柳幻舟が昭和天皇祝賀パレードに向けて爆竹を投げつけた事件で、罰金四万円の判決を受けた。彼女は役者の子として、差別された経験から、次のように語ってい

る。

「同じ人間なのに、どうして良い血と悪い血があるのですか。私も流れている血は同じです」

それから長い間マスコミに彼女の名前が出ることはなかった。だからといって、ことさら関心はない。ところがある日、新聞の小さな記事が目にとまった。「花柳幻舟さん転落し？死亡」という見出しである。疑問符が打たれていることが謎である。記者も自殺かも：と疑っていたのかもしれない。騒動女にあり得ないこともない。しかし読んでいるうちに事故死ということが分かった。場所は群馬県の安中市。橋の上からカメラで写真を撮っていて、誤って転落したと見られており、本人の傘も見つかった。彼女の本名は川井洋子ということを知った。幻舟などと名乗ると、武装しているようで怖いのが、川井洋子なら、どこにでもいるありふれた女性という感じがして、親しみさえ覚えてた。